

る。前者は臨床家にとっての日常診療行為としての評価指標にできる可能性があり、後者はたとえ前者の臨床的分類は異なっても、現在の診断群分類が包括対象とする資源投入量の観点から大きな弁別的差異がない場合、臨床分類を統合して支払い評価分類として簡素化する考えにもなるのである。

更にこの統合自体が支払い分類としての弁別的妥当性を向上させる可能性を実は秘めている。具体的には、『支払い評価分類』は、分類構成が樹形図という、臨床疾患群、手術、処置、副傷病による層別分岐構造で、結果的に分岐が進むに従って症例数が少なくなるという構造的特性を有している。資源投入量に大きな影響をもたらす層が、病名としての疾患群などの上層になく、それらに投入される治療などの下層の因子にある場合は、そこで症例数のしほりで細かく配慮できない構造上の問題点を有している。

したがって疾患群（病名）が資源投入に大きな影響を与えない場合には、基本 DPC<sup>ii</sup>である最上層の疾患群をただ単に細かくしてしまうと、それらに対する資源投入量・種類は同等なのに、投入量のばらつきに大きな影響をもたらす下層の因子が細かく考慮されない場合もある。端的に言えば、大した影響もないところで分岐させることが、実態に合うのかどうかの検証ともいえる。診断群分類数としての管理可能性の観点からも、分類統合を臨床的妥当性も担保しつつ、統合することは必要と考える。

以上のように、疾患群、手術・処置などを臨床的観点からみると、在院日数や支払いなどにどのようなばらつきをもたらすのか、学会から提案のあった臨床情報、副傷病や年齢などの重症度は分類上の配慮を必要とするの

かどうか、さまざまな観点から検証されるべき事項があろう。

今回、医療費関連指標として在院日数（以下 LOS）、診療報酬総点数（cALL）、包括範囲総点数（cDPC）<sup>iii</sup>、現行の『包括範囲一日点数（dDPC）』を目的変数として、前述の角度からいかなる問題点があるのか、平成 15 年度 7 月から 10 月まで特定機能病院、民間病院で収集されたデータを活用し分析した。そしてそこで問題になった因子に関して、定義テーブル<sup>iv</sup>や樹形図<sup>v</sup>に反映させることで、より妥当な支払い分類としての DPC 分類につなげることが大きな目的である。

研究目的：①定義テーブル上にある、疾患群や手術・処置、年齢の現状分析、②投入される資源の均質性と臨床的妥当性の観点から診断群分類を幾つかの基本 DPC で統合させ、医療費関連指標（LOS,cALL,cDPC,dDPC）を目的変数とし、支払い評価として留意すべき説明因子を探る。その過程で、基本 DPC で統合された支払い分類や学会から提言のあった臨床情報の妥当性を検証すること、③更に副傷病を系統的に整理し、かつ副傷病が上述指標にいかなる影響をもっているのかを検討、④医療の質の評価として、退院時転帰（入院後 24 時間以内死亡を除く死亡退院）に影響をもつリスク因子（年齢なのか、疾患なのか、手術・処置なのか、地域や施設母体なのか）は何かの分析、である。

## B.研究方法

### 対象

平成 15 年度 7 月から 10 月まで特定機能病院から収集した患者情報（臨床情報〈様式 1〉、診療報酬点数情報〈様式 2 他〉）の内、胸部

胸壁先天奇形関連として MDC14『胸壁の変形および先天異常（DPC6 桁分類 140260）』

『肺の先天性異常（DPC6 桁分類 140270）』

『気道の先天異常（DPC6 桁分類 140280）』

『出産障害による横隔神経麻痺（DPC6 桁分類 160230）』『横隔膜腫瘍、横隔膜疾患（新生児含む）（DPC6 桁分類 040220）』の入院後 24 時間以内死亡症例を除外した 400 件〔内退院時死亡患者 7 件〕である。ここで説明因子として分析したものは以下の通りである。患者属性因子

①年齢因子：1 歳未満、1 歳以上 15 歳未満、15 歳以上未満の 3 カテゴリー

②性別

③施設地域：北海道、東北、関東、中部、近畿、中国、四国、九州

④施設母体：国立、公立<sup>vi</sup>、私立

⑤施設機能：特定機能病院<sup>vii</sup>、民間病院

⑥救急車搬送の有無(ambulcat)

⑦臨床情報

疾患群<sup>viii</sup>：ICD10 は胸部胸壁臓器の先天異常形態を明示しているので、ここでは ICD がもつ臨床情報で以下のように整理した。

胸壁奇形、気管奇形、肺奇形、横隔膜

⑧手術手技<sup>ix</sup>：

手術手技はデータセット様式 1 の収集で 5 項目採取しており、これらの情報を以下のように整理した。

漏斗胸手術、肺切除、気管手術、横隔膜手術

⑨処置

中心静脈栄養(ivhdum)

人工呼吸(ventidum)

人工透析(hddum)

リハビリ(rihadum)

以上の有無を分析した。

⑩入院時併存症、入院後併発症（以下 CC\*）：

慢性併存症、急性併存症、急性併発症を Manitoba-Darhmouth&Charlson

Comorbidity Index の（以下 MD 指標）<sup>xi</sup>を活用し、以下のように整理した。

■ 入院時慢性併存症

糖尿病(dcindm)（合併症を有する糖尿病:dcinsdm<sup>xii</sup>、有しないもの:dcinmdm<sup>xiii</sup>）、痴呆(dcindem)<sup>xiv</sup>、対麻痺(dcinprp)<sup>xv</sup>、慢性肺疾患(dcinpd)<sup>xvi</sup>、末梢血管障害(dcinpvd)<sup>xvii</sup>、腎臓疾患(dcinrd)<sup>xviii</sup>、慢性腎不全(dcincr)<sup>xix</sup>、自己免疫疾患(dcinctd)<sup>xx</sup>、肝障害(dcinld)（慢性肝障害:dcinmld<sup>xxi</sup>、重症肝障害:dcinsld<sup>xxii</sup>）、悪性新生物(dcinmal)<sup>xxiii</sup>

■ 入院時急性併存症

急性心筋梗塞(dcinami)<sup>xxiv</sup>、脳血管障害(dcinva)<sup>xxv</sup>、胃十二指腸潰瘍(dcinpu)<sup>xxvi</sup>、感染症(dcininf)<sup>xxvii</sup>、急性腎不全(dcinarf)<sup>xxviii</sup>、急性呼吸不全(dcinapf)<sup>xxix</sup>、心不全(dcinahf)<sup>xxx</sup>、急性肝不全(dcinalf)<sup>xxxi</sup>、DIC(dcindic)<sup>xxxii</sup>

■ 入院後急性併発症

急性心筋梗塞(dccami)、脳血管障害(dccva)、胃十二指腸潰瘍(dccpu)、感染症(dccinf)、急性腎不全(dccarf)、急性呼吸不全(dccapf)、心不全(dccahf)、急性肝不全(dccalf)、DIC(dccdic)、静脈血栓塞栓、肺梗塞(dccdvt)<sup>xxxiii</sup>、手術関連併発症(dcccomp)<sup>xxxiv</sup>について、様式 1 の入院時併存症（4 つ併記）入院後併発症（3 つ併記）から該当 ICD10 コードを収集し、有無を検索した。

目的変数として、コストの代替変数の医療費関連指標（LOS, cALL, cDPC dDPC）を選択した。また医療の質評価のために、退院時死亡確率（入院 24 時間以内死亡例を除く）も目的変数とした。

解析方法：上記目的変数に影響すると思われる因子を抽出するために、各説明因子を強制投入し重回帰分析を行い、偏回帰係数や標準化係数が大きくかつ統計的有意なものを検索した。また施設因子（施設地域、設立母体）の投入前後の重回帰分析<sup>xxxv</sup>も行い、決定係数の差を調べた。医療の質の評価については、退院時死亡（入院 24 時間以内死亡患者を除く）に関してロジスチック回帰分析を行い、死亡確率に影響するリスク因子（図表D群でオッズ比：凡例・表の中でExp(B)と表記）を分析した。尚、前記分析の際の対照群は文末脚注で示す。統計処理は SPSS for Win(Ver11.0)を用いた。統計学的有意差を 0.05 とした。

### C.結果

年齢は 1 歳未満 62 件(15.5%)、1 歳以上 15 歳未満 207 件(51.8%)、15 歳以上 131 件(32.8%)で、ヒストグラムではなだらかな右に裾を引く 1 峰性分布であった(図A群)。男性 253 件(63.3%)、女性 147 件(36.8%)であった。

地域は北海道 16 件(4.0%)、東北 51 件(12.8%)、関東 133 件(33.3%)、中部 46 件(11.5%)、近畿 52 件(13.0%)、中国 39 件(9.8%)、四国 14 件(3.5%)、九州 49 件(12.3%)であった。施設母体は国立 177 件(44.3%)、公立 27 件(6.8%)、私立 196 件(49.0%)、特定機能 358 件(89.5%)、民間 42 件(10.5%)であった。救急車搬入は 20 件(5.0%)、退院時死亡は 7 件(1.8%)であった。

先天性形態異常では胸壁奇形 218 件(54.5%)、気管奇形 38 件(9.5%)、肺奇形 35 件(8.8%)、横隔膜 109 件(27.3%)であった。

入院時併存症では、合併症を有する糖尿病 4

件(1.0%)、合併症のない糖尿病 0 件(0.0%)、痴呆 0 件(0.0%)、慢性肺疾患 25 件(6.3%)、対麻痺 0 件(0.0%)、末梢血管障害 2 件(0.5%)、腎臓疾患 1 件(0.3%)、慢性腎不全 2 件(0.5%)、自己免疫疾患 1 件(0.3%)、慢性肝障害 5 件(1.3%)、重症肝障害 0 件(0.0%)、悪性新生物 2 件(0.5%)であった。

急性併存症では、急性心筋梗塞 0 件(0.0%)、脳血管障害 1 件(0.3%)、胃十二指腸潰瘍 2 件(0.5%)、感染症 0 件(0.0%)、急性腎不全 0 件(0.0%)、急性呼吸不全 7 件(1.8%)、心不全 3 件(0.8%)、急性肝不全 0 件(0.0%)、DIC1 件(0.3%)であった。

入院後急性併発症では、急性心筋梗塞 0 件(0.0%)、脳血管障害 0 件(0.0%)、胃十二指腸潰瘍 3 件(0.8%)、感染症 0 件(0.0%)、急性腎不全 0 件(0.0%)、急性呼吸不全 1 件(0.3%)、心不全 1 件(0.3%)、急性肝不全 0 件(0.0%)、DIC1 件(0.3%)、静脈血栓塞栓、肺梗塞 0 件(0.0%)、手術関連続発症 4 件(1.0%)であった。

手術は漏斗胸手術 156 件(39.0%)、肺切除 20 件(5.0%)、気管手術 6 件(1.5%)、横隔膜手術 59 件(14.8%)であった。

施行処置は中心静脈栄養 30 件(7.5%)、人工呼吸 45 件(11.3%)、人工透析 0 件(0.0%)、リハビリは 10 件(2.5%)であった。

医療費関連指標である LOS,cALL,cDPC、に関して各説明因子毎の箱ひげ図を見ると、1 歳未満、救急車搬送で高かった。疾患群では肺奇形、横隔膜奇形の疾患が高かった。施設地域、機能では差がなかった。内科急性併存症を有する例で高かった。手術処置では横隔膜、肺手術で、処置施行例で高かった。

一方 dDPC については、1 歳未満、救急車搬送で高かった。臨床疾患群では肺奇形、横

隔膜奇形の疾患で高かった。内科急性併存症を有する例で高かった。手術処置では横隔膜、肺手術、処置施行例で高かった。処置ではリハビリで低かった（図B群）。

各目的変数の分布は、LOS,cALL,cDPC,では右に裾をひく一峰性分布、dDPCは対称な一峰性分布であった（図B群）。LOS,cALL,cDPCの重回帰分析では、決定係数は各々0.453（施設因子投入後0.468）、0.570(0.583),0.548(0.567)であった（表C群）。dDPCでは決定係数は0.322(0.335)であった（表C群）。

説明因子のうち、特に標準化係数に関して、大きくかつ有意確率が0.05以下のものを順にみると、LOS（施設因子投入による分析）では中心静脈栄養（標準化係数0.399）、横隔膜手術（標準化係数0.263）であった。cALLでは中心静脈栄養（標準化係数0.375）、漏斗胸手術（標準化係数0.316）、cDPCでは中心静脈栄養（標準化係数0.427）、人工呼吸（標準化係数0.232）、dDPCでは横隔膜奇形（標準化係数0.250）、人工呼吸（標準化係数0.213）であった（図C群）。

#### D.考察

診断群分類（手術、処置、副傷病名、重症度）の臨床的妥当性をLOS,cALL,cDPC,dDPCから分析し、支払い分類として継続的に精緻化または簡素化していく作業は必要と思われる。現行の一日定額支払いのもとでは、各説明因子の決定係数は、一件当たり包括額など他の3つの医療費関連指標に比較し低かった。しかしどの評価指標にしろ、影響する因子を同定し、これらが妥当に評価されるべきであるのは急務である。

今回、特に『胸壁の変形および先天異常（DPC6 桁分類140260）』『肺の先天性異常（DPC6 桁分類140270）』『気道の先天異常（DPC6 桁分類140280）』『出産障害による横膈神経麻痺（DPC6 桁分類160230）』『横膈膜腫瘍、横膈膜疾患（新生児含む）（DPC6 桁分類040220）』の診断群分類において、包括範囲一日点数の観点、臨床疾患（横膈膜奇形）と処置（人工呼吸）が相対的に大きな影響を持っていた。支払い分類方法を妥当に簡素化する観点において、胸部臓器奇形の差異を分析したが、横膈膜奇形の包括範囲一日点数への影響が大きく、これら基本DPCの統合の妥当性に議論が必要と思われる。また『横膈膜腫瘍、横膈膜疾患（新生児含む）（DPC6 桁分類040220）』の診断群分類名称の整理が必要である。新生児にせよ成人にせよ横膈膜良性疾患（ヘルニア、弛緩症）と腫瘍ではまったく異なる概念であり、ICDコードの分類も腫瘍は意識していないからである。

#### E.結論

DPC分類の精緻化の試みを、胸部胸壁先天奇形関連としてMDC14『胸壁の変形および先天異常（DPC6 桁分類140260）』『肺の先天性異常（DPC6 桁分類140270）』『気道の先天異常（DPC6 桁分類140280）』『出産障害による横膈神経麻痺（DPC6 桁分類160230）』『横膈膜腫瘍、横膈膜疾患（新生児含む）（DPC6 桁分類040220）』を用いて行った。

現行支払い制度(dDPC)は、LOS,cALL,cDPCに比較し、各因子の説明力が低かった。また包括範囲一日点数において、臨床疾患群と処置（人工呼吸）が相対的に大きな影響を持っていた。具体的には各種胸壁胸部臓器先天奇

形の差異を分析では、横隔膜奇形の包括範囲  
一日点数への影響が大きく、これら基本 DPC  
の統合の妥当性に議論が必要と思われる。また  
『横隔膜腫瘍、横隔膜疾患（新生児含む）  
（DPC6 桁分類 040220）』の診断群分類名称  
の変更が必要で、横隔膜良性疾患（ヘルニア、  
弛緩症）とすべきである。

#### F.研究発表

平成 17 年 1 月現在未発表

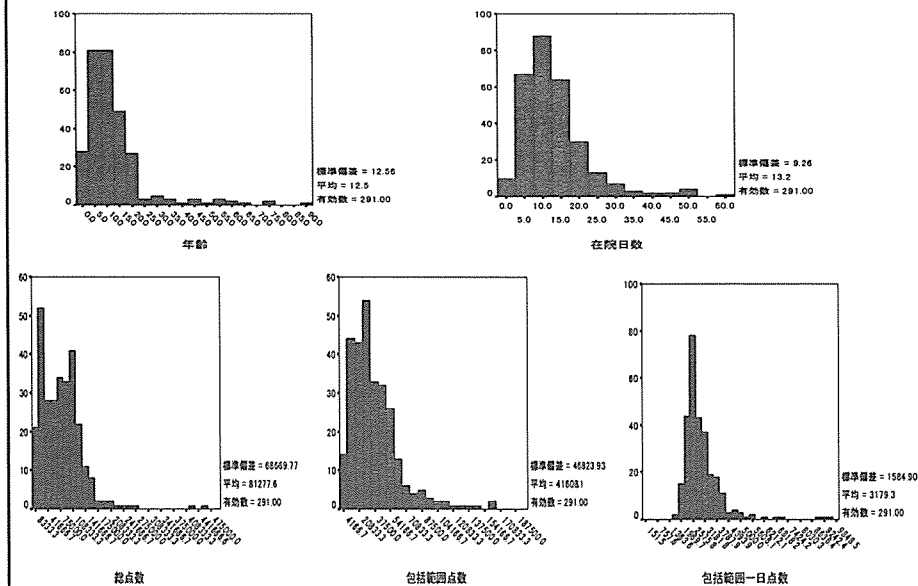
#### G.知的所有権の取得状況

該当せず

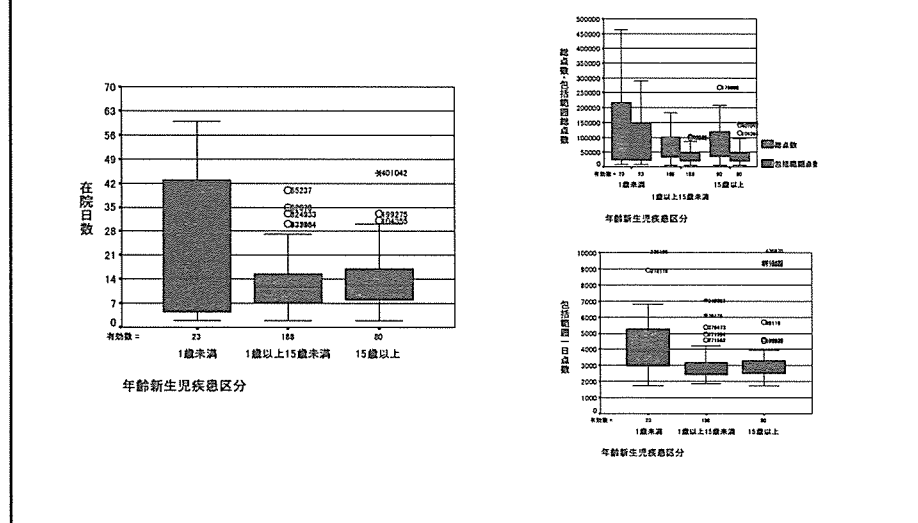
- 
- i 支払い分類としては、症例数 20 例以上、目的とする変数の変動係数が 1 未満という規則で、支払い分類が作成される。
  - ii DPC は 14 桁コードから構成されている。その左の 6 桁は臓器と病理・病勢の組み合わせを意味する。基本 DPC ともいう
  - iii 入院基本料等加算、指導管理、リハビリテーション、精神科専門療法、手術・麻酔、放射線治療、心臓カテーテル法による諸検査、内視鏡検査、診断穿刺・検体採取、1000 点以上の処置については、従来どおりの出来高評価である。それ以外の入院加算料、特定入院基本料、画像および画像診断合計、検査合計、処置合計、内服、頓服、外用、麻毒、注射、皮下筋肉内注射、注射その他合計などは包括範囲支払い評価とし、包括範囲総点数とした
  - iv 疾患群に対して行われる手術群、処置群、副傷病名群、重症度などを、学会（保険医療に詳しい専門医集団）から意見集約し、最大公約数として定義テーブルに表記している。このテーブルを基にして、症例数や変動係数に留意しながら樹形図や支払いが決定されることが望ましいが、データに基づいた臨床的妥当性の検証が更に行われることが望ましい
  - v 臨床的概念を重視し、臨床病名とそれに対する手術、処置、更には副傷病や各重症度を階層的に樹形図として表記している
  - vi 自治体立の特定機能病院、民間病院以外に、社会保険病院、日赤、労災病院、済生会病院。
  - vii 大学付属病院と国立がんセンター、循環器センター。
  - viii 先天性形態異常では胸壁奇形 Q676-8,Q765、気管奇形 Q32\$,、肺奇形 Q33\$,、横隔膜他 J986,K44\$,Q790,Q793 とした。
  - ix 手術は 5 項目収集しており、組み合わせがあった場合、難易度の順に優先選択し、カテゴリー化している。手術は診療報酬点数コード上のコードから、漏斗胸手術 K487\$,、肺切除 K5111-3,K513、気管手術 K519,K508,K508-2、横隔膜手術 K534\$,K535\$,K536,K537-2,K537\$ とし、これ以外の手術は 1 つに集約した。
  - x C(Comorbidity),C(Complication)と称する。更に Complication を併発症（入院後手術、処置と直接因果関係のない疾患）と続発症（入院後行われた手術・処置に直接因果関係のあるもの）とに区別することがある。今回併発症は深部静脈血栓症や肺梗塞としている。また手術処置関連続発症は各 MDC 毎に、T81\$,87\$から妥当なものを拾っている。
  - xi 今回副傷病として、MD 指標,Charlson 指標を活用したのは、現行定義テーブルの副傷病が MDC 間（DPC 間ですら）整合性がなく、未整理のままであり、これを整理する目的もかねて前述副傷病をリストアップし、これに深部静脈血栓、肺塞栓を追加した。肝障害のところにも妥当と思われる ICD10 コードを MD 指標に追加している。悪性疾患の DPC においては、悪性新生物の MD 指標はカウントしなかった。
  - xii ICD10 コードでは E102-8,E112-8,E122-8,E132-8,E142-8 と MD 指標では定義している。

- 
- xiii E100,E110,E120,E130,E140,E101,E111,E121,E131,E141,E109,E119,E129,E139,E149  
xiv F00-F021,F03\$,G30\$-G311  
xv G81\$,G041,G820,822-3  
xvi J40,J41\$-47\$,J60-1,J62\$,J63-5,J66\$,J67\$, J961,J969  
xvii I70\$,I71\$,I72\$,I73,I771,R02  
xviii N01\$,N03\$,N05\$,N07\$,N19,N25\$  
xix N18\$  
xx M05-M06,M08-M09,M32\$-M34\$,M35\$  
xxi K700,K701,K709,K710,K713-716,K718,K719,,K721,K729,K73\$,K748,K760-761,K768-769  
xxii I850,I859K702-704,K711,K712,K717,K720,K740-746,K762-767  
xxiii C00\$-C96\$,D890,Z85\$  
xxiv I21\$,I22\$,I252  
xxv I60\$-69\$,G45\$,G46\$  
xxvi K25\$-28\$  
xxvii A\$\$\$ ,B\$\$\$  
xxviii N17\$  
xxix J960  
xxx I50\$  
xxxi B150,B160,B162,B190,K720  
xxxii D65  
xxxiii I260,I269,I80\$  
xxxiv T81\$-87\$を手術関連続発症とした。創感染、出血、膿瘍形成、人工物挿入合併症などが該当する。  
xxxv 対照は年齢で 15 歳以上、女性、地域では関東、私立とした。先天性形態異常では『胸壁奇形』、手術は『手術なし群』を対照とした。他因子は無群を対照とした。

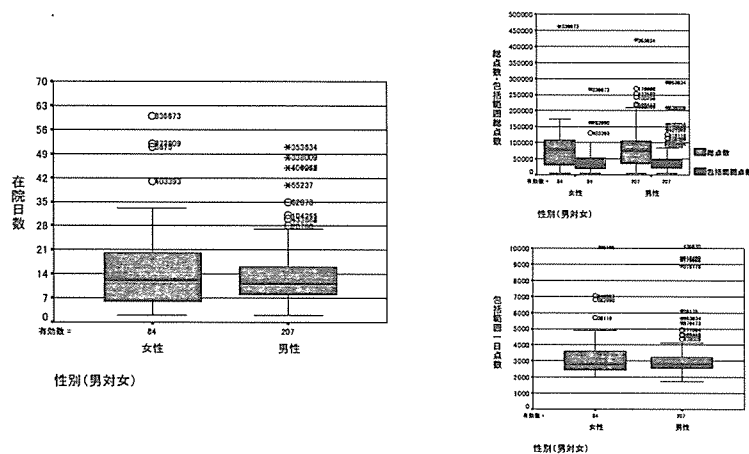
図A群



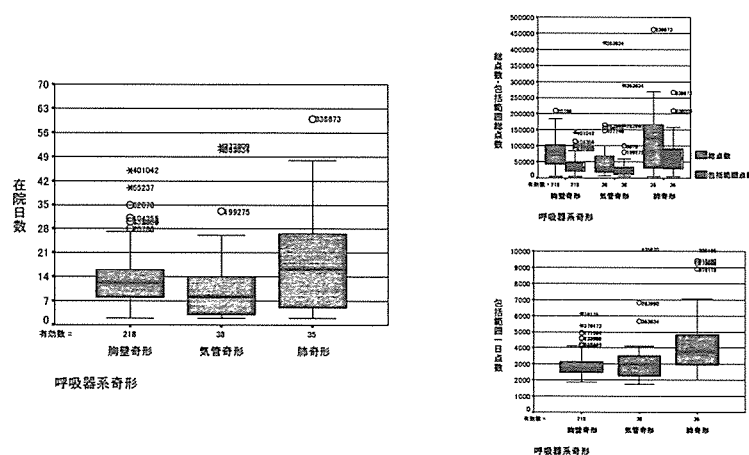
図B群(年齢)



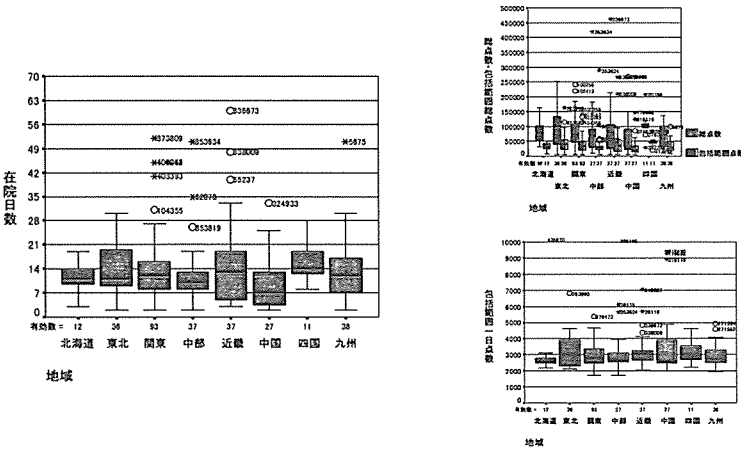
図B群(性別)



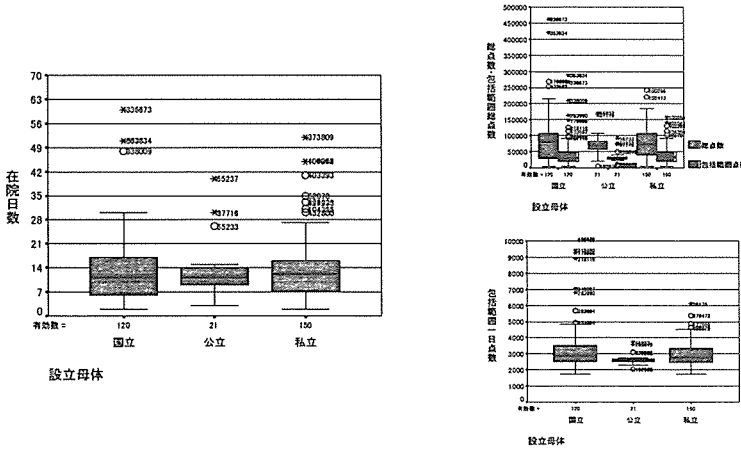
図B群(病態)



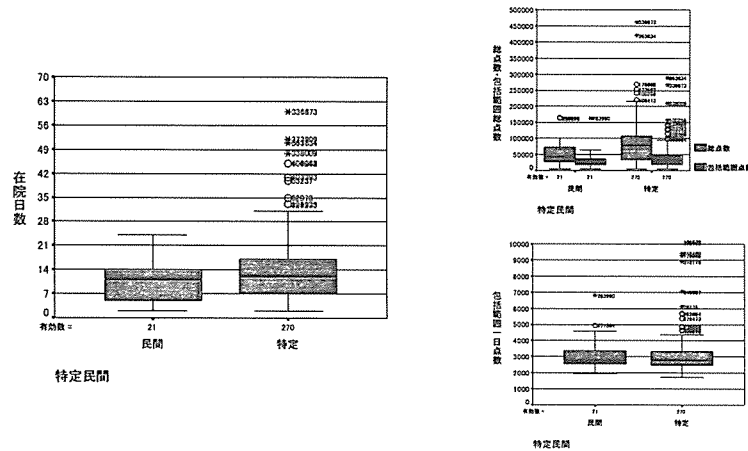
図B群(地域施設)



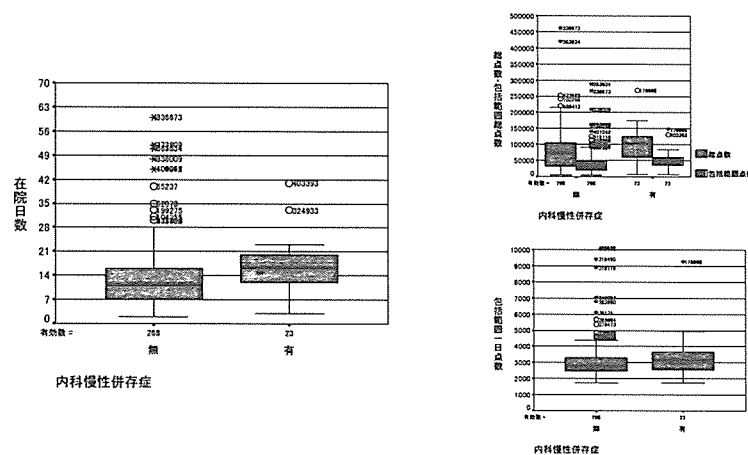
図B群(施設母体)



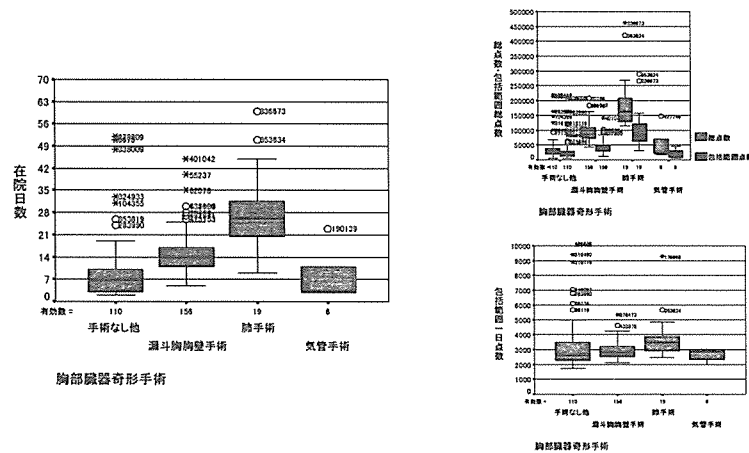
## 図B群(施設機能)



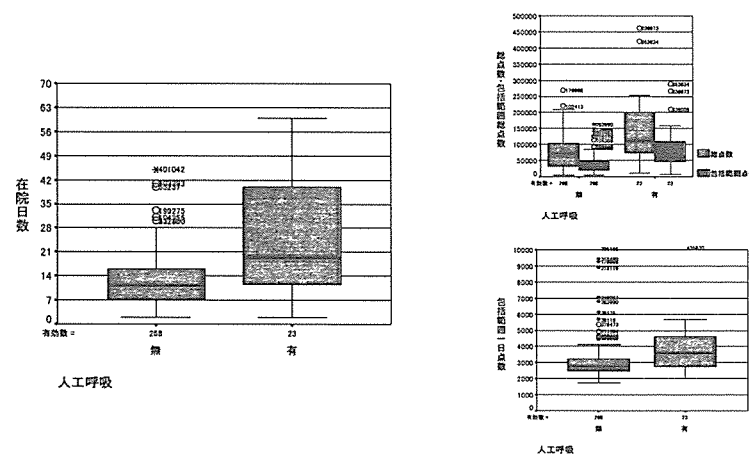
## 図B群(内科慢性併存症)



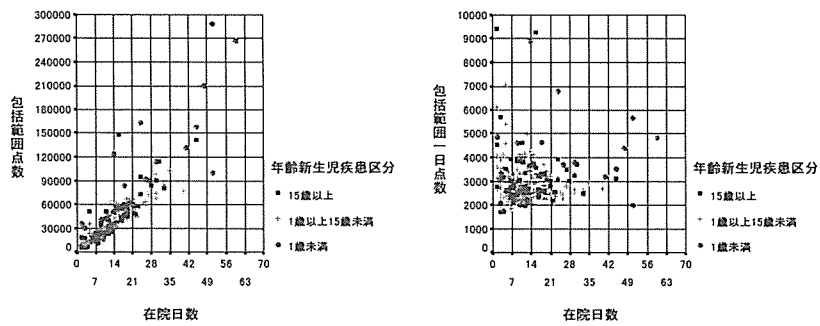
## 図B群(手術)



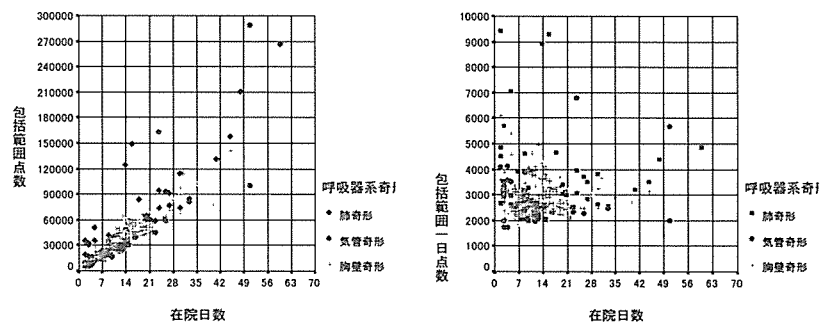
## 図B群(人工呼吸)



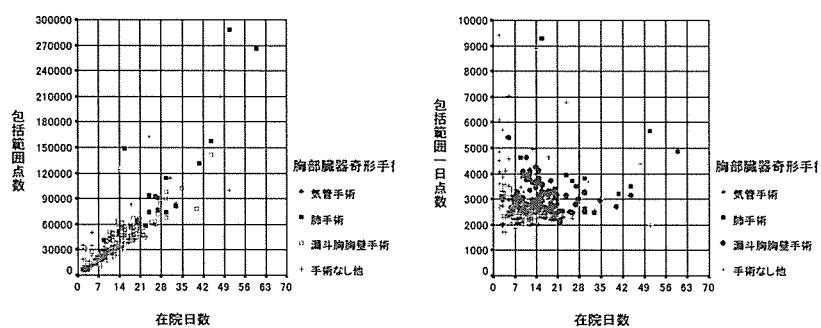
## 図B群(年齢)



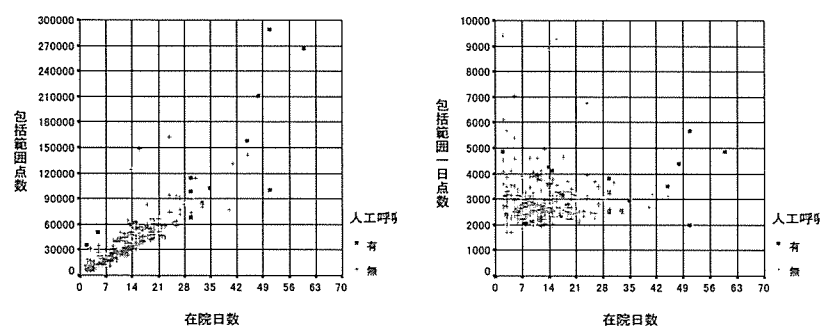
## 図B群(病態)



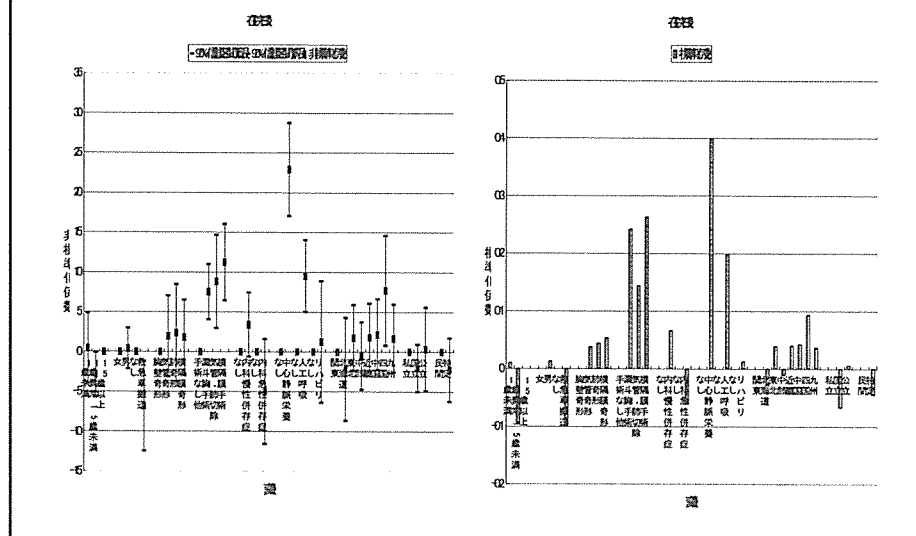
## 図B群(手術)



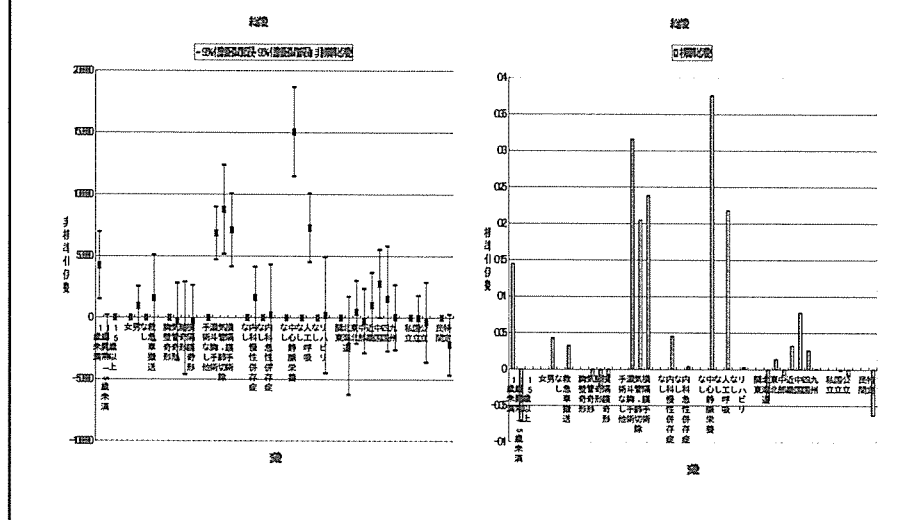
## 図B群(人工呼吸)



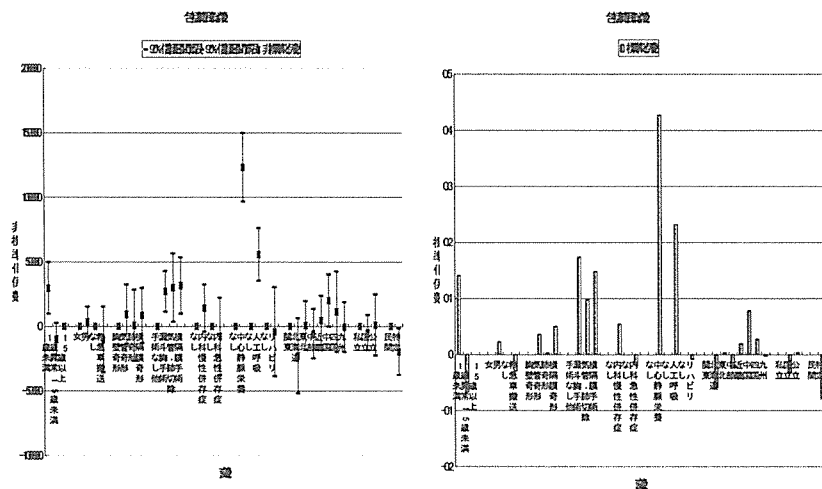
## 図C群(LOS分析)



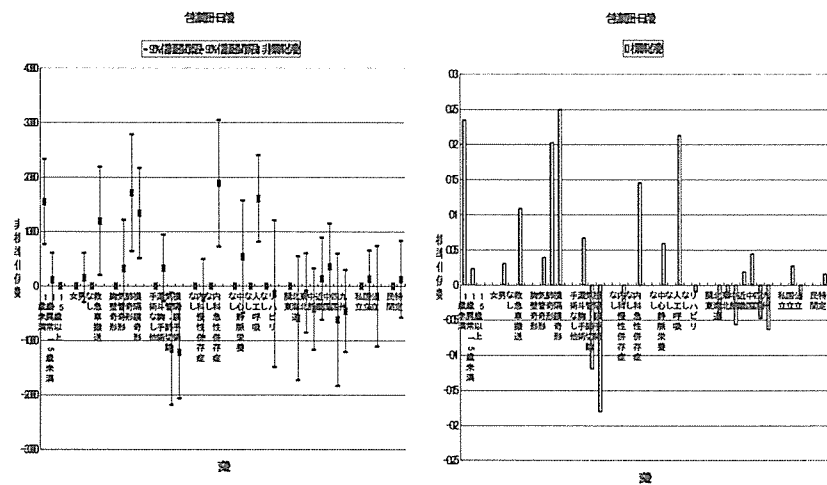
## 図C群(cALL分析)



### 図C群(cDPC分析)



### 図C群(dDPC分析)



平成 16 年度厚生科学研究費補助金（政策科学推進研究事業）  
診断群分類を活用した医療サービスのコスト推計に関する調査研究  
研究報告書

診断群分類の精緻化（支払い分類簡素化の視点から）

MDC14 鼻耳奇形関連

『先天性鼻涙管閉塞（DPC6 桁分類 140090）』『鼻の異常（先天性、後天性）（DPC6 桁分類 140110）』『小耳症、耳介異常（DPC6 桁分類 140190）』『外耳道閉鎖（DPC6 桁分類 140200）』『先天性耳瘻孔、副耳（DPC6 桁分類 140210）』『耳の疾患（その他）（DPC6 桁分類 140220）』

報告者

桑原 一彰 京都大学大学院医学研究科 医療経済学分野 研究協力者

今中 雄一 京都大学大学院医学研究科 医療経済学分野 教授 分担研究者

診断群分類（DPC）の問題点を継続的に分析し、より妥当な評価体制につなげていくことは急務である。臨床分類としての診断群分類を支払い分類として管理可能なものに簡素化しようとする場合、疾患群に投入される資源として何が一番大きな因子（疾患なのか、疾患に投入される治療なのか）なのかを模索することは必要である。今回、鼻耳奇形関連として MDC14 『先天性鼻涙管閉塞（DPC6 桁分類 140090）』『鼻の異常（先天性、後天性）（DPC6 桁分類 140110）』『小耳症、耳介異常（DPC6 桁分類 140190）』『外耳道閉鎖（DPC6 桁分類 140200）』『先天性耳瘻孔、副耳（DPC6 桁分類 140210）』『耳の疾患（その他）（DPC6 桁分類 140220）』を選択し、その分類の妥当性検証を、平成 15 年度 7 月から 10 月にかけて収集されたデータをもとに行った。包括範囲一目点数において、臨床疾患群（耳介外耳奇形）に配慮（別途独立評価）を要することが判明した。臨床分類としての診断群分類を保ちながら、支払い分類方法を妥当に簡素化・効率化する観点において、耳介外耳奇形が相対的に大きな影響を持っており、今回の分析対象の臨床疾患群では耳介外耳奇形以外の統合は妥当であろうが、議論が必要と思われた。

#### A. 研究背景と目的

平成 15 年度 4 月より特定機能病院において順次支払いに導入された診断群分類（DPC）は、保険医療に精通する臨床専門科集団の意見を参考にしながら、翌 16 年にも見直しが行われ、民間病院の試行的適応されながら今日に至っている。一方、厚生労働省は診断群分類の支払い評価分類としての妥当性検証と、診断群分類の簡素化に関して検討の意向も表

示している。そもそも診断群分類には『臨床的分類』としての意味合いと、『支払い評価分類』としての意味を持たせることが可能である。前者は臨床家にとっての日常診療行為としての評価指標にできる可能性があり、後者はたとえ前者の臨床的分類は異なっても、現在の診断群分類が包括対象とする資源投入量の観点から大きな弁別的差異がない場合、臨床分類を統合して支払い評価分類として簡素

化する考えにもなるのである。

更にこの統合自体が支払い分類としての弁別的妥当性を向上させる可能性を実は秘めている。具体的には、『支払い評価分類』は、分類構成が樹形図という、臨床疾患群、手術、処置、副傷病による層別分岐構造で、結果的に分岐が進むに従って症例数が少なくなるという構造的特性を有している。資源投入量に大きな影響をもたらす層が、病名としての疾患群などの上層になく、それらに投入される治療などの下層の因子にある場合は、そこで症例数のしほり<sup>i</sup>で細かく配慮できない構造上の問題点を有している。

したがって疾患群（病名）が資源投入に大きな影響を与えない場合には、基本 DPC<sup>ii</sup>である最上層の疾患群をただ単に細かくしてしまうと、それらに対する資源投入量・種類は同等なのに、投入量のばらつきに大きな影響をもたらす下層の因子が細かく考慮されない場合もある。端的に言えば、大した影響もないところで分岐させることが、実態に合うのかどうかの検証ともいえる。診断群分類数としての管理可能性の観点からも、分類統合を臨床的妥当性も担保しつつ、統合することは必要と考える。

以上のように、疾患群、手術・処置などを臨床的観点からみると、在院日数や支払いなどにどのようなばらつきをもたらすのか、学会から提案のあった臨床情報、副傷病や年齢などの重症度は分類上の配慮を必要とするのかどうか、さまざまな観点から検証されるべき事項であろう。

今回、医療費関連指標として在院日数（以下 LOS）、診療報酬総点数（cALL）、包括範囲総点数（cDPC）<sup>iii</sup>、現行の『包括範囲一日点数（dDPC）』を目的変数として、前述の角度から

いかなる問題点があるのか、平成 15 年度 7 月から 10 月まで特定機能病院、民間病院で収集されたデータを活用し分析した。そしてそこで問題になった因子に関して、定義テーブル<sup>iv</sup>や樹形図<sup>v</sup>に反映させることで、より妥当な支払い分類としての DPC 分類につなげることが大きな目的である。

研究目的：①定義テーブル上にある、疾患群や手術・処置、年齢の現状分析、②投入される資源の均質性と臨床的妥当性の観点から診断群分類を幾つかの基本 DPC で統合させ、医療費関連指標（LOS,cALL,cDPC,dDPC）を目的変数とし、支払い評価として留意すべき説明因子を探る。その過程で、基本 DPC で統合された支払い分類や学会から提言のあった臨床情報の妥当性を検証すること、③更に副傷病を系統的に整理し、かつ副傷病が上述指標にいかなる影響をもっているのかを検討、④医療の質の評価として、退院時転帰（入院後 24 時間以内死亡を除く死亡退院）に影響をもつリスク因子（年齢なのか、疾患なのか、手術・処置なのか、地域や施設母体なのか）は何かの分析、である。

## B.研究方法

### 対象

平成 15 年度 7 月から 10 月まで特定機能病院から収集した患者情報（臨床情報〈様式 1〉、診療報酬点数情報〈様式 2 他〉）の内、鼻耳奇形関連として MDC14『先天性鼻涙管閉塞（DPC6 桁分類 140090）』『鼻の異常（先天性、後天性）（DPC6 桁分類 140110）』『小耳症、耳介異常（DPC6 桁分類 140190）』『外耳道閉鎖（DPC6 桁分類 140200）』『先天性耳瘻孔、副耳（DPC6 桁分類 140210）』『耳

の疾患（その他）（DPC6 桁分類 140220）』の入院後 24 時間以内死亡症例を除外した 775 件〔内退院時死亡患者 0 件〕である。ここで説明因子として分析したものは以下の通りである。

患者属性因子

- ①年齢因子：1 歳未満、1 歳以上 15 歳未満、15 歳以上未満の 3 カテゴリー
- ②性別
- ③施設地域：北海道、東北、関東、中部、近畿、中国、四国、九州
- ④施設母体：国立、公立<sup>vi</sup>、私立
- ⑤施設機能：特定機能病院<sup>vii</sup>、民間病院
- ⑥救急車搬送の有無(ambulcat)

臨床情報

- ⑦疾患群<sup>viii</sup>：ICD10 は奇形形態を明示しているので、ここでは ICD がもつ臨床情報で以下のように整理した。

奇形形態：鼻奇形、耳介外耳奇形、中耳内耳奇形、鰓裂奇形瘻ほか、耳瘻孔

- ⑧手術手技<sup>ix</sup>：

手術手技はデータセット様式 1 の収集で 5 項目採取しており、これらの情報を以下のように整理した。

鼻形成、耳瘻管切除、頸瘻摘出、副耳切除、耳介形成、小耳形成、外耳道形成、鼓室形成

- ⑨処置

骨移植手術<sup>x</sup>

再建手術（皮膚移植）(reconsum)<sup>xi</sup>

再建手術（有茎、遊離組織移植）(reconfsu)<sup>xii</sup>

中心静脈栄養(ivhdum)

人工呼吸(ventidum)

人工透析(hddum)

リハビリ(rihadum)

以上の有無を分析した。

- ⑩入院時併存症、入院後併発症（以下

CC<sup>xiii</sup>）：

慢性併存症、急性併存症、急性併発症を Manitoba-Darhmouth&Charlson

Comorbidity Index の（以下MD指標）<sup>xiv</sup>を活用し、以下のように整理した。

#### ■ 入院時慢性併存症

糖尿病(dcindm)（合併症を有する糖尿病:dcinsdm<sup>xv</sup>、有しないもの:dcinmdm<sup>xvi</sup>）、痴呆(dcindem)<sup>xvii</sup>、対麻痺(dcinprp)<sup>xviii</sup>、慢性肺疾患(dcinpd)<sup>xix</sup>、末梢血管障害(dcinpvd)<sup>xx</sup>、腎臓疾患(dcinrd)<sup>xxi</sup>、慢性腎不全(dcinrcf)<sup>xxii</sup>、自己免疫疾患(dcinctd)<sup>xxiii</sup>、肝障害(dcinld)（慢性肝障害:dcinmld<sup>xxiv</sup>、重症肝障害:dcinsld<sup>xxv</sup>）、悪性新生物(dcinmal)<sup>xxvi</sup>

#### ■ 入院時急性併存症

急性心筋梗塞(dcinami)<sup>xxvii</sup>、脳血管障害(dcincva)<sup>xxviii</sup>、胃十二指腸潰瘍(dcinpu)<sup>xxix</sup>、感染症(dcininf)<sup>xxx</sup>、急性腎不全(dcinarf)<sup>xxxi</sup>、急性呼吸不全(dcinapf)<sup>xxxii</sup>、心不全(dcinahf)<sup>xxxiii</sup>、急性肝不全(dcinalf)<sup>xxxiv</sup>、DIC(dcindic)<sup>xxxv</sup>

#### ■ 入院後急性併発症

急性心筋梗塞(dccami)、脳血管障害(dccava)、胃十二指腸潰瘍(dccpu)、感染症(dccinf)、急性腎不全(dccarf)、急性呼吸不全(dccapf)、心不全(dccahf)、急性肝不全(dccalf)、DIC(dccdic)、静脈血栓塞栓、肺梗塞(dccdvt)<sup>xxxvi</sup>、手術関連続発症(dcccomp)<sup>xxxvii</sup>について、様式 1 の入院時併存症（4 つ併記）入院後併発症（3 つ併記）から該当 ICD10 コードを収集し、有無を検索した。

目的変数として、コストの代替変数の医療費関連指標（LOS,cALL, cDPC dDPC）を選択した。また医療の質評価のために、退院時死

亡確率（入院 24 時間以内死亡例を除く）も目的変数とした。

解析方法：上記目的変数に影響すると思われる因子を抽出するために、各説明因子を強制投入し重回帰分析を行い、偏回帰係数や標準化係数が大きくかつ統計的有意なものを検索した。また施設因子（施設地域、設立母体）の投入前後の重回帰分析<sup>xxxviii</sup>も行い、決定係数の差を調べた。医療の質の評価については、退院時死亡（入院 24 時間以内死亡患者を除く）に関してロジスチック回帰分析を行い、死亡確率に影響するリスク因子（図表D群でオッズ比：凡例・表の中でExp(B)と表記）を分析した。尚、前記分析の際の対照群は文末脚注で示す。統計処理はSPSS for Win(Ver11.0)を用いた。統計学的有意差を0.05とした。

### C.結果

年齢は1歳未満63件(8.1%)、1歳以上15歳未満440件(56.8%)、15歳以上272件(35.1%)で、ヒストグラムではなだらかな右に裾を引く2峰性分布であった（図A群）。男性399件(51.5%)、女性376件(48.5%)、であった。地域は北海道35件(4.5%)、東北58件(7.5%)、関東275件(35.5%)、中部130件(16.8%)、近畿90件(11.6%)、中国56件(7.2%)、四国28件(3.6%)、九州103件(13.3%)であった。施設母体は国立251件(32.4%)、公立88件(11.4%)、私立436件(56.3%)、特定機能655件(84.5%)、民間120件(15.5%)であった。救急車搬入は3件(0.4%)、退院時死亡は0件(0.0%)であった。奇形形態では鼻奇形94件(12.1%)、耳介外耳奇形413件(53.3%)、中耳内耳奇形55件

(7.1%)、鰓裂奇形瘻ほか40件(5.2%)、耳瘻孔173件(22.3%)であった。

入院時併存症では、合併症を有する糖尿病0件(0.0%)、合併症のない糖尿病3件(0.4%)、痴呆0件(0.0%)、慢性肺疾患5件(0.6%)、対麻痺0件(0.0%)、末梢血管障害0件(0.0%)、腎臓疾患0件(0.0%)、慢性腎不全0件(0.0%)、自己免疫疾患0件(0.0%)、慢性肝障害3件(0.4%)、重症肝障害0件(0.0%)、悪性新生物1件(0.1%)であった。

急性併存症では、急性心筋梗塞0件(0.0%)、脳血管障害0件(0.0%)、胃十二指腸潰瘍0件(0.0%)、感染症0件(0.0%)、急性腎不全0件(0.0%)、急性呼吸不全0件(0.0%)、心不全0件(0.0%)、急性肝不全0件(0.0%)、DIC0件(0.0%)であった。

入院後急性併発症では、急性心筋梗塞0件(0.0%)、脳血管障害0件(0.0%)、胃十二指腸潰瘍2件(0.3%)、感染症0件(0.0%)、急性腎不全0件(0.0%)、急性呼吸不全0件(0.0%)、心不全0件(0.0%)、急性肝不全0件(0.0%)、DIC0件(0.0%)、静脈血栓塞栓、肺梗塞0件(0.0%)、手術関連続発症9件(1.2%)であった。

手術は鼻形成69件(8.9%)、耳瘻管切除156件(20.1%)、頸瘻摘出37件(4.8%)、副耳切除80件(10.3%)、耳介形成100件(12.9%)、小耳形成162件(20.9%)、外耳道形成17件(2.2%)、鼓室形成63件(8.1%)であった。

施行処置は気管切開0件(0.0%)、骨移植55件(7.1%)、再建手術（皮膚移植など）85件(11.0%)、再建手術（遊離有茎組織移植）64件(8.3%)、中心静脈栄養1件(0.1%)、人工呼吸2件(0.3%)、人工透析0件(0.0%)、リハビリは2件(0.3%)であった。

医療費関連指標である LOS,cALL,cDPC, に関して各説明因子毎の箱ひげ図を見ると、年齢順に高く、疾患群では耳瘻孔が低かった。施設機能で特定が高かった。副傷病を有する例で高かった。手術では鼓室形成、小耳形成が高かった。

一方 dDPC については、年齢順に低くなったが、臨床疾患群、施設、副傷病で差がなかった。手術では副耳形成で高かった(図B群)。

各目的変数の分布は、LOS,cALL,cDPC, では右に裾をひく一峰性分布、dDPC は対称な一峰性分布であった(図B群)。LOS,cALL,cDPC の重回帰分析では、決定係数は各々0.411(施設因子投入後 0.440)、0.547(0.554)、0.333(0.357)であった(表C群)。dDPC では決定係数は0.299(0.324)であった(表C群)。

説明因子のうち、特に標準化係数に関して、大きくかつ有意確率が 0.05 以下のものを順にみると、LOS(施設因子投入による分析)では小耳形成(標準化係数 0.424)、鼓室形成(標準化係数 0.290)であった。cALL では小耳形成(標準化係数 0.590)、鼓室形成(標準化係数 0.494)、cDPC では小耳形成(標準化係数 0.376)、鼻奇形(標準化係数 0.341)、dDPC では1歳未満(標準化係数 0.263)、耳介外耳奇形(標準化係数-0.298)であった(図C群)。

#### D.考察

診断群分類(手術、処置、副傷病名、重症度)の臨床的妥当性を LOS,cALL,cDPC,dDPC から分析し、支払い分類として継続的に精緻化または簡素化していく作業は必要と思われる。現行の一日定額支払いのもとでは、各説明因子の決定係数は、一件当たり包括額など

他の3つの医療費関連指標に比較し低かった。しかしどの評価指標にしる、影響する因子を同定し、これらが妥当に評価されるべきであるのは急務である。

今回、特に『先天性鼻涙管閉塞(DPC6 桁分類 140090)』『鼻の異常(先天性、後天性)(DPC6 桁分類 140110)』『小耳症、耳介異常(DPC6 桁分類 140190)』『外耳道閉鎖(DPC6 桁分類 140200)』『先天性耳瘻孔、副耳(DPC6 桁分類 140210)』『耳の疾患(その他)(DPC6 桁分類 140220)』の診断群分類において、包括範囲・点数の観点では臨床疾患群(耳介外耳奇形)が他の因子に比較し、大きく支払いに影響している。今回の分析対象での臨床疾患群での統合に関して、耳介外耳奇形以外は妥当と思われるが、議論が必要である。また処置の頻度が少なく、分類上の考慮の必要性は相対的に低いと思われた。

#### E.結論

DPC 分類の精緻化の試みを、鼻耳奇形関連として MDC14『先天性鼻涙管閉塞(DPC6 桁分類 140090)』『鼻の異常(先天性、後天性)(DPC6 桁分類 140110)』『小耳症、耳介異常(DPC6 桁分類 140190)』『外耳道閉鎖(DPC6 桁分類 140200)』『先天性耳瘻孔、副耳(DPC6 桁分類 140210)』『耳の疾患(その他)(DPC6 桁分類 140220)』を用いて行った。

現行支払い制度(dDPC)は、LOS,cALL,cDPC に比較し、各因子の説明力に差はなかった。またいずれの医療費関連指標においても、臨床疾患群(耳介外耳奇形)が相対的に大きな影響を持っていた。今回の分析対象の臨床疾患群では耳介外耳奇形以外の統合は妥当であ